



# 元気っ子

No.28 ながさわ保育園

園長 中瀬 弦 偉

6月に入りました。先月は送迎についてのお願いのお願いを出させて頂きました。心苦しいお願いではありますが、保護者の皆さまのご理解とご協力を頂いているおかげで大きな混乱もなく、スムーズにお子さんの受け渡しができています。引き続きご協力頂きますようお願い申し上げます。また、何か「こういう場合はどうしたらいいのだろう」などご不明な点がありましたらお問い合わせ下さい。

さて、保育の要諦を一言で表すと「心が自ら一歩踏み出すように支えること」と言えると思います。この「自ら」という言葉こそが最も大切なキーワードになります。その根拠は厚生労働省が定める「保育所保育指針」の中からも読み取れます。例えば、保育の内容を五つの領域（健康・人間関係・環境・言葉・表現）に分けて、そのねらいを定めているのですが、「健康」の領域については「自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う」とあります。大人がアレコレと危なくないように、何でもモノを排除したりして経験をさせないと、危険を回避する力が育ちません。つまり自ら危険を回避できるようになるために支えることが大切だということです。

また「人間関係」の領域については「支え合って生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う」とあります。ここでは「自立心」がキーワードになります。依存することなく、思いやりや優しさをもって仲間たちと支え合って生活をしていけるような力を養うということになります。保育の現場に目をやると、最近の子どもたちは友達同士のケンカやトラブルが起きると、すぐに「先生ー！」とやってきます。子どもたちの集団生活の場です。ケンカやトラブルは当たり前です。なので、大人がやらなくてはいけないことはケンカやトラブルを回避するような対応ではなく、子どもたちがケンカやトラブルに対して、相手とどのように折り合いをつけられるか、その力を養うことが必要な対応になります。

これらの力を獲得していくのは、大人が何かを教えて修得していくものではありません。それこそ子どもたち自らが、環境を通じた実体験を元に獲得していく力なのです。特に人間関係における力は「非認知能力」と言われ、交渉力や自制心、妥協する心やくじけな心など、子どもたちにとって未来を生きていくうえでとても大切な力になります。

こういった力の獲得のためには大人がしっかりと、こういった環境を整えることが必要なのかを熟考していく必要があります。「保育所保育指針」には「保育士は（中略）その職責を遂行するための専門性の向上に絶えず努めなければならない」と書かれています。日々、研鑽に努め、子どもたちに真心を持って接していけるよう、これからも前進して参ります。

ながさわ保育園が導入している「見守る保育」の総本山「新宿せいが子ども園」の卒園児は小学校の作文で、「何があってもくじけない心をもつ人になる」と書いていたそうです。非認知能力が育っている証です。

